

西之本村自治公民館前に遠矢落碑が、長田^{ないこざか}（鳴子坂下の土手）に遠矢射碑があります。遠矢とは、どれだけ遠くまで矢を放てるかを競うもので、太平の世における武術錬成用の競技でした。遠矢碑は、弓の名手だった西村時員（西之村の地頭西村時苗の次男）が、強弓さを人々に示すために建てたとされており、当時の競技の様子とともに当時の生活の雰囲気をも今に伝える貴重な資料です。

碑文によれば宝永 3 年（1706）の正月吉日に、遠矢射碑の辺りから矢を放ちました。その矢が落ちた場所が遠矢落碑の場所で、その距離は 4 町 3 段 3 間 1 尺 5 寸（約 500 m）でした。検見武士（遠矢を確認する武士）は、遠藤家統・西村時次・遠藤家欽・上妻隆居で、竿取（距離を測る者）は日高実直・岩坪武継で、指南を向田氏宗次がつとめたことなどが記されています。

口碑によれば、この時の遠矢は、まず亀の甲（本村一田代間の山の山頂）から一番矢を放ち、それが遠矢射碑のある長田に落ち、二番矢は長田から放ち、遠矢落碑のある中之崎に落ち、三番矢は中之崎から放ち、高筒に落ちたそうです。矢の距離はいずれも 4 町 3 段 3 間 1 尺 5 寸だったそうで、矢の落ちたそれぞれの地点に碑が建てられましたが、三番目の高筒には碑が現存していません。また、別の口碑によれば、一番矢を矢鉾の峰から放ち、落ちた所がジュルシで、ここに小さな石がありました。そこから二番矢を放ったところ、亀の甲^{たかどう}に落ちました。以下、三番矢が長田、四番矢が中之崎、五番矢が高土であったといえます。



遠矢落碑



遠矢射碑